

上にゐて、嶺けはしく谷ふかゝりける所なれば、路さかしく侍故に常に來朝する事不叶となん申ける。其後は、常に參て年魚やうの物を獻けるとかや。今之國栖の奏とて、歌を謠ひ、笛をふきならすは、吉野より年始に參たるといふ心なり。

〔日本書紀十應神〕十九年十月朔、幸吉野宮。時國棟人來朝之、因以醴酒獻于天皇而歌之曰、伽辭能輔珥。豫區周塙苑區利、豫區周珥、伽綿蘆淤朋瀨枳、宇摩羅珥、枳虛之茂知塙勢、磨呂俄智、歌之既訖、則打口以仰唉。今國棟獻土毛之日、歌訖、即擊口仰唉者、蓋上古之遺則也。夫國棟者、其爲人甚淳朴也。每取山菓食、亦煮蝦蟆爲上味。名曰毛瀨、其土自京東南之隔山而居于吉野河上、峯峻谷深、道路狹巘、故雖不遠於京、本希朝來、然自此之後屢參趣以獻土毛、其土毛者、栗、菌及年魚之類焉。

〔源平盛衰記二十五〕館奏吉野國栖事

吉野國栖トハ、舞人也。國栖ハ人人姓也。淨見原ノ天皇、大伴皇子ニ襲レテ、吉野ノ奥ニ籠リ、岩屋ノ中ニ忍御座ケルニ。國栖ノ翁、粟ノ御料ニウグヒト云魚ヲ具シテ、供御ニ備ヘ奉ル。朕帝位ニ上ラバ、翁ト供御ト召ント。被思召ケルニヨリテ、大伴ノ皇子ヲ誅シ、位ニ即テ召レシヨリ以來、元日ノ御祝ニハ、國栖ノ翁參テ、桐竹ニ鳳凰ノ裝束ヲ給テ舞フトカヤ。豐ノアカツノ五節ニモ、此翁參テ、栗ノ御料ニウグヒノ魚ヲ持參シテ、御祝ニ進ラスル。殿上ヨリ國栖ト召ル、ノ時ハ、聲ニテ御答ヲ申サズ、笛ヲ吹テ參ルナリ。此翁ノ參ラヌニハ、五節始ル事ナシ、斯ル目出キ様ドモ、兵革火炎ニ奉ラズ。

〔小右記〕寛弘八年正月一日、四方拜如例。○中次々事存例、無國棟奏、依不參上也。近年如之、是大和守頼親時被調、已不參上云々。

〔内裏式上〕會

皇帝受群臣賀訖、遷御豐樂殿饗宴侍臣。○中及宴將終、內藏縫殿兩寮分入延明門、置納被櫃庭中。○中